

各関係機関長様

佐賀県農業技術防除センター所長

育苗圃におけるイチゴうどんこ病、炭疽病の防除対策について

- 親株ランナー発生期からの育苗圃の防除を徹底しよう！ -

イチゴうどんこ病、炭疽病は、感染した親株が伝染源となり、子苗での発生につながります。そのため、親株のランナー発生期から定期的な薬剤防除を行う必要があります。

については、下記を参考に防除指導の徹底を図ってください。

記

1. うどんこ病

本病は育苗圃での発生が多いと本圃での発生も増加します。平成26年産は育苗圃での発生が抑えられず、感染した苗が定植されたため、本圃でも多発生傾向で推移しました(図1)。平成27年産の親株では、4月下旬(20~23日)の巡回調査において、発生株率は9.5%(平成4.6%、前年0.3%)であり、平成よりやや多い発生となっています(図2)。本圃での発生を未然に防ぐため、育苗圃での防除を徹底して健全苗の育成に努めましょう。

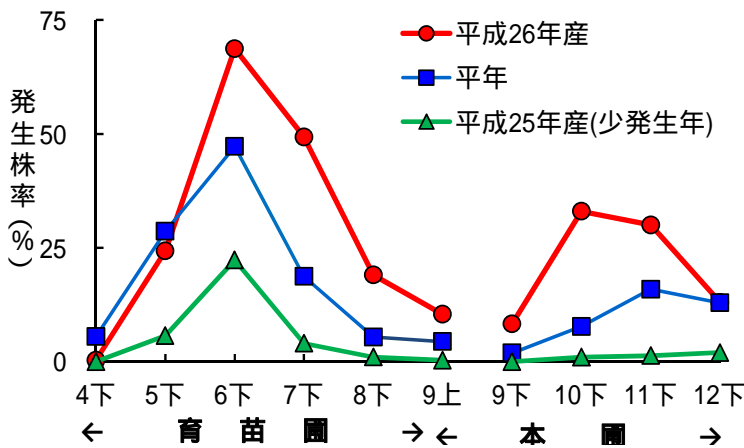


図1 育苗圃と本圃におけるうどんこ病発生率の関係

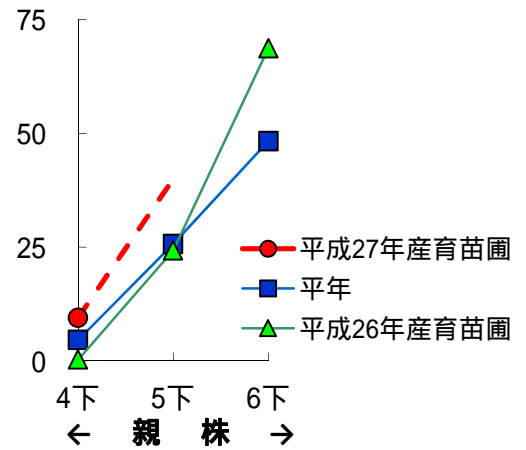


図2 平成27年産の発生状況

1) 耕種的防除

- (1)罹病部位は除去し、圃場外で適切に処分する。
- (2)軟弱徒長株において発生しやすいため、通風や日当たりを良くし、適切な肥培管理を行う。

2) 薬剤防除

- (1)葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように古葉を除去して、丁寧に散布を行う。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、育苗期間を通じて、下記の表1を参考に別系統の薬剤でローテーション散布を行う。

Qol 剤(アミスター20 フロアブル、ストロビーフロアブル)低感受性菌による防除効果の低下

が確認されている。そのため、これらの薬剤については効果の低下が認められる圃場では使用しない。また、効果が認められる圃場においても、育苗圃から本圃終了までの使用を1回にとどめる。

SDHI 剤のアフェットフロアブルに対する耐性菌による防除効果の低下を防ぐため、育苗圃から本圃終了までの本剤の使用は1回にとどめる。

(3)防除薬剤の詳細については、県病害虫防除のてびき 188～191 頁を参照する。

(4)イチゴにおける各薬剤の使用回数は、親株からランナーを切り離れた時から収穫終了までの期間でカウントされるため、使用にあたっては注意する。

表1 主なイチゴうどんこ病の防除薬剤

系統	薬剤名	希釈濃度(倍)	使用時期	使用回数	備考	予防	治療
	ベルクト水和剤	1,000	育苗期	5回以内	200～300L/10a		
+	ダイマジン	2,000	収穫前日まで	2回以内	150～300L/10a		
	フルピカフロアブル	2,000～3,000	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a		
	サンヨール	500～1,000	収穫前日まで	6回以内	100～300L/10a		
	ボトキラー水和剤	1,000	発病前～ 発病初期	-	150～300L/10a		
	アグロケア水和剤	1,000～2,000	収穫前日まで	-	100～300L/10a		
	ボトピカ水和剤	2,000～4,000	発病前～発病 初期まで	-	100～300L/10a		
+	クリーンカップ	1,000～2,000	収穫前日まで	-	100～300L/10a		
	モレスタン水和剤	3,000～4,000	収穫前日まで	2回以内	高温時の薬害に注意		
	ラー水水和剤	4,000～8,000	収穫前日まで	3回以内	150～300L/10a		
	ルビゲン水和剤	4,000	収穫前日まで	3回以内			
	サンリット水和剤	2,000～4,000	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a		
	トリフミン水和剤	3,000～5,000	収穫前日まで	5回以内	100～300L/10a		
+	パンチョTF顆粒水和剤	2,000	収穫前日まで	2回以内	100～300L/10a		
	アミスター20フロアブル	1,500～2,000	収穫前日まで	苗床4回以内	100～300L/10a		
	ストロビーフロアブル	3,000～5,000	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a		
+	ファンベル顆粒水和剤	1,000	収穫前日まで	2回以内	100～300L/10a		
	ポリオキシシンAL乳剤	1,000	収穫開始14日 前まで	3回以内			
	ポリオキシシンAL水和剤	1,000	収穫開始14日 前まで	3回以内	100～300L/10a		
	カリグリーン	800～1,000	収穫前日まで	-	100～300L/10a		
	ハーモメイト水溶剤	800～1,000	収穫前日まで	-	150～300L/10a		
+	ジーファイン水和剤	750～1,000	収穫前日まで	-	150～500L/10a		
	オレート液剤	100	発病初期～収 穫前日まで	-	100～300L/10a		
	エコピタ液剤	100	収穫前日まで	-	100～300L/10a		
	アフェットフロアブル	2,000	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a		
	ガッテン乳剤	5,000	収穫前日まで	2回以内	100～300L/10a		
	イオウフロアブル	1,000	親株床初期	-	薬害防止のため高温 期の使用は控えると同 時に、本剤の散布間隔 は1ヶ月以上空ける。 展着剤は加用しない。 果実の汚れを防止す るため、本圃での使用 は開花前までとする。		
		2,000	親株床中期～ 本圃初期	-			

系統番号 グアニジン系 アニリノピリミジン系 有機銅 微生物 キノキサリン系
DMI(エルゴステロール生合成阻害剤) QoI剤 抗生物質 天然系 ヒドロキシアニリド系
その他1 無機銅 脂肪酸系 その他2 SDHI(コハク酸脱水素酵素阻害剤) チアゾリジン系
無機硫黄系

2. 炭疽病

昨年は、夏季の多雨の影響で、育苗後期に炭疽病の発生が見られる圃場が多くあったため、平成27年産親株での潜在感染の可能性が考えられます。本病は、4月以降に降雨や灌水で感染親株から周囲へ孢子が飛散することにより感染が拡大します。そのため、親株からランナーが発生する時期から定期的な薬剤防除を行い、子苗の感染を防ぎましょう。

1) 耕種的防除

- (1) 発病株や発病したランナー、枯れた下葉や葉柄等は早急に除去し、圃場外で適切に処分する。
- (2) 傷口からの感染を防ぐため、摘葉、採苗等の作業等は晴天時に行い、作業終了後は薬剤防除を行う。
- (3) 育苗期間を通じてビニル雨よけを行う。
- (4) 灌水の水滴が大きいと水はねによって孢子が飛散するため、水滴が小さい灌水装置等を用いる。
- (5) 必要な苗数が確保できたら、親株はすみやかに除去する。

2) 薬剤防除

- (1) 育苗期間を通じて、下記の表2を参考に別系統の薬剤でローテーション散布を行う。
- (2) ゲッター水和剤及びセイビアーフロアブル20に対する耐性菌による効果の低下を防ぐため、育苗期間を通じて両剤の使用回数は各3回以内にとどめる。
- (3) その他防除薬剤の詳細については、県病害虫防除のてびき 193～195頁を参照する。

表2 主なイチゴ炭疽病の防除薬剤

系統	薬剤名	希釈濃度(倍)	使用時期	使用回数	備考
	アントラコール顆粒水和剤	500	仮植栽培期	6回以内	150～300L/10a
	ジマンダイセン水和剤	600	仮植栽培期(但し収穫76日前まで)	6回以内	100～300L/10a
	デランフロアブル	1,000	育苗期	2回以内	100～300L/10a
	オキシンドー水和剤80	1,000	育苗期	3回以内	100～300L/10a
	キノドーフロアブル	100	育苗期	3回以内	100倍はクラウン部散布5ml/株
500～800		100～300L/10a			
	ベルコート水和剤	1,000	育苗期(定植前)	5回以内	200～300L/10a
	オーソサイド水和剤80	800	収穫30日前まで	3回以内	100～300L/10a
+	ゲッター水和剤	1,000	収穫開始21日前まで	3回以内	100～300L/10a
	セイビアーフロアブル20	1,000	収穫前日まで	3回以内	100～300L/10a

系統番号	ジチオカーバメート	キノン系	有機銅
	グアニジン系	フタルイミド系	ベンズイミダゾール系
	N-フェニルカーバメート系	フェニルピロール系	